



西田彰一先生のご逝去をいたむ

本学会北陸支部長を長年務められ、土質工学会功労章を受けられた新潟大学名誉教授、理学博士西田彰一先生は、昭和60年1月4日午前11時32分、

ぼうこうガンのため新潟大学付属病院で急逝されました。享年74才でした。

先生は、明治43年札幌市にお生まれになり、昭和10年に北海道大学理学部地質学鉱物学科を卒業され、2年間の助手生活の後、昭和12年に南満州鉄道所属の地質調査所に入られ、昭和14年に大陸科学院に移られました。満州時代の先生は、主に中生層の研究を続けられ、昭和20年には、吉林省において油母頁岩鉱床を発見された功労に対して満州国政府より賞を授与されました。

戦後は、地質調査所技官等を経て、昭和25年に、前年に発足したばかりの新潟大学理学部教授に赴任されました。以後、昭和51年に退官されるまでの26年間、地質学教室の基礎づくりや整備拡充に尽力され、地質学専攻の多くの学生を世に送り出されました。退官後、3年間、日本大学工学部教授（郡山）として勤務され、株式会社日さくの技術相談役も務められました。

先生は、長年にわたる教育研究のほかに、評議員、理学部長として大学の管理運営に寄与されたほか、日本地質学会評議員、日本学術会議研究連絡委員会委員、石油審議会委員、地すべり学会運営委員、新潟県の各種審議会委員などを歴任されました。

先生のご専門は、構造地質学で、地質学プロパーとしての御研究では、総合研究班の代表者としてまとめられたグリーン・タフ地向斜の研究があげられます。この時には、山深い新潟県下の難波山をほうように歩かれて、詳細な地質図を作成されたと聞いています。また、地すべりの多いグリーン・タフ地域の御研究が、その後、先生が地すべりの研究に興味を持たれるきっかけにもなったとも聞いています。

先生が応用地質学または災害の御研究を通して、土質工学分野との関係を持たれるようになったのは、昭和39年6月16日の新潟地震が契機であったと先生自身が述べられて

います¹⁾。地震後、先生がチーフとなって地質学教室の教官、学生が総力をあげて作成した縮尺3千分の1の“地盤災害図”は、関係者の間で、今だに高く評価されています。地震後に設けられた土質工学会の地盤災害委員会に、先生も委員として参加され、工学関係の諸先生と知り合うことにより、理学と工学の接点というところに目をむけるきっかけとなったと述べられています。

昭和42年8月には、新潟県北部で崩壊・土石流が多発した羽越豪雨災害の調査にも、先生は代表者として活躍され、災害関係に一層深い関心をもたれるようになりました。

昭和44年には、新潟大学理学部に付属の地盤災害施設（のちの積雪地域災害研究センター）が発足し、先生は、退官されるまで初代施設長として勤められました。私は、はからずも、昭和45年から西田先生の下で、地盤災害の研究に従事することになりました。施設発足当時、新潟県下では、死者の出た地すべり、崩壊が多発し、融雪期とはいえ、1～2mの深さの雪の中を先生とはいずりまわった事が思い出されます。また、5年間ばかり、新潟県砂防課のご好意で、危険度の高い地すべり地を毎年2～3箇所精査する機会をもち、この調査を通して、それまでの地質研究者の固定観念から、地すべりの地形、表層地質、地下水の解析へと脱皮するきっかけを我々に与えてくれたと感じています。これは、現場で、宿で、研究室で、先生をかこんで、小人数ながら、ある時は酒をくみかわしての討論の結果であることは、いうまでもありません。

先生は、量はあまり多くはありませんが、酒をこよなく愛され、夕方の新潟市古町の居酒屋で、新潟名酒をまずで黙々と飲んでおられたお姿が今でも目に浮んできます。昨年、ぼうこうの手術をされた後、年が明けたら一杯飲もうとお電話をいただきながら、わずか2日間の入院で急逝されるとは、思ってもみませんでした。先に奥様をがんで亡くされた先生は、天国で奥様とお会いになっているかも知れません。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1) ニュース担当グループ委員会：西田彰一先生と語る、土と基礎，Vol. 29, No. 7, pp. 81～84, 1981.

（新潟大学教授 青木 滋）
社団法人 土質工学会